

新しい家族のかたち

さくま ゆみこ

青山学院女子短期大学は、現代を生きる女性に必要な「人間のちから」を育もうとしている。そのためには、女性がどのように自らの可能性を育み、どのように家族を形成し、暮らしをつくり、社会の一員として生きていくかについて考察しておくことが重要である。また、「人間のちから」を育むひとつの重要な基盤は家族体験の中にある。このプロジェクトは、その「家族」に焦点を当てて研究を行ってきた。

家族が血縁による結びつきを前提とするものであるという旧来の家族観から解放されて、血縁を越えた家庭的な共同体の構築の意味を考えると同時に、逆に現代における血縁のもつ意味も再度捉え直そうと思ったのである。共同研究の目的は、新たな家族のかたちとその可能性を探ること、新たな視点から今日そしてこれからの家族を展望すること、人を活かす家族のありようを具体的な作品や営みの中に探求すること、研究成果を研究と教育の共同体である本学の教育活動にも反映すること等であった。

このプロジェクトでは、研究分野の違う者が集まって、それぞれの視点で今の社会に必要とされる「新しい家族のかたち」を追求し、意見交換を行ってきた。所員及び客員研究員と、それぞれの研究テーマは以下のとおりである。

さくまゆみこ（子ども学科元教授）「絵本や児童文学にみる新しい家族のかたち」

横堀昌子（子ども学科教授）「非血縁の家族形成のかたちと養育の営み」

宇田美江（現代教養学科准教授）「家族の変容と女性のキャリア形成」

鈴木宏枝（白鷗大学准教授）「ファンタジー文学にみる家族像の変遷」

私たちは、2015年度に研究発表会を4回と、外部から講師を招いての講演会を2回開催した。

研究発表会は以下の通りである。

- (1) 横堀昌子「非血縁の『家族』の暮らし～ファミリー・グループホーム 横堀ホームの生活実践の中から」（11月21日）

「日本初のファミリーホーム」と社会的養護関係者から位置づけられてきた横堀ホームにおいて、里親委託や多様な経緯で受け入れた子どもや大人と生活をともにした経験に焦点化し考察対象として取りあげた実践研究報告。生活の記録を用いて検討しつつ、血縁を超えた家族の絆が育まれていく過程と生み出されてきた姿を発表した。人と人との関係性の中で、場を与えられ、人が自己の存在意義を見出し、成長し、

変化していくこと、地域とともに暮らしが在ることの意味等について、具体的な生活場面を通して考察した。

- (2) 宇田美江「ワークライフ・バランス施策推進における『寄り添い』型チェンジ・エージェントの役割～在宅勤務制度導入企業を事例として」(12月21日)

当初は、女性のキャリア形成をテーマとして考えていたが、企業における柔軟な働き方の摸索について興味を持つようになり、企業においてワーク・ライフ・バランス施策をどのように推進しているか、その要因をチェンジ・エージェント（変革者）から探ることとした。柔軟な働き方が求められる背景とともに、企業におけるチェンジ・エージェントが在宅勤務制度を中心に、組織において、どのように変革したか、2つの企業の事例から考察した。

- (3) さくまゆみこ「リアリスティック・フィクションに見る家族像の変遷～英米児童文学を中心に」(2016年2月4日)

家族をテーマにしている英米の作家たちとその作品を取り上げ、どのように家族像が変遷してきたかを考察した。かつてはローラ・インガルス・ワイルダーが描いたような、母親が父親に従い子どもは親に従い、一致団結している血縁の家族像が理想とされていたが、時代の変化とともに単親家族、里子や養子、継父や継母、異年齢の子どもだけで作る疑似家族、LGBTの親の家族など、従来型から離れた新たな家族像が登場してきている。また作家の中には、血縁よりは愛情をもって一緒に過ごす時間が家族の結びつきを深めるという意識も定着してきていることを考察した。

- (4) 鈴木宏枝「ファンタジー文学における新しい家族像～ル＝グウィン『アースシー』シリーズの考察」(3月3日)

2015年9月にケンブリッジで開催された国際学会 Alice through Ages での研究発表と、グロスターのビアトリクス・ポター博物館、ロンドンの大英図書館貴重書展示室、ビクトリア&アルバート子ども博物館の見学で得た知見を報告した。さらに、ファンタジー文学における新しい家族像を検討するにあたり、1960年代に出版されたル＝グウィンのアースシー・シリーズを分析し、様々な固定観念を転覆してきたシリーズの中で家族像にも変化が加えられ、血縁のつながりを重視しない共同体が模索されていることを発表した。

また、外部講師を招いての講演会は、以下の2回であった。

- (1) 佐藤百合子氏（産業能率大学経営学部元教授。専門は労働経済学。日本テレワーク学会理事）「ワーク・ライフ・バランスと在宅勤務」(10月19日)

女性の社会進出が進み、ワーク・ライフ・バランス（仕事と私生活の調和）という考え方が広まり、時間や場所を柔軟に働きたいというニーズが高まってきたこと、さらにICT（情報通信技術）が発展したことで、働き方の多様化が進んできたという背景について語られた。この働き方の多様化について、「在宅勤務制度」を中心に「フレックスタイム制」「裁量労働制」等の定義と現状について解説していただき、これからの柔軟な働き方の可能性と課題について、多くの示唆をいただいた。

- (2) 西山利佳氏（児童文学研究者）雑誌「日本児童文学」の編集長であった西山氏

より、日本の児童文学が描く家族像、特に子どもの描き方の変遷について、さまざまな作品から解説をいただいた。近年は、家族はこうあるべきといった固定観念から抜け出し、重い現実を受け止める子ども像や血縁を超えた家族像が描かれている現状、その描き方における問題点等の示唆をいただいた。

2年目にあたる2015年度も、各研究員のテーマに基づいて研究を深め、さまざまな視点から意見交換をすることができた。当初は漠然としか見えていなかった「新しい家族のかたち」が共同研究を経て、かなり具体的に見えるようになってきたので、研究プロジェクトの成果があったと考えることができる。今後も各自の研究の場で、さらに考察を深化させていければと考えている。